

寮生活の思い出

愛知県立一宮高等技術専門校の三上さんから紹介をいただいた上山です。三上さんは、訓大の寮で同じ釜の飯を食べさせていただいた、とても優しい先輩でした。

当時の寮といえば三人で一部屋。プライバシーなどある訳がなく常に相手が何をしているか、見ればすぐにわかる状況でした。何週間も風呂に入らない人、マンガ本でベッドが埋まっていた人、勉強ばかりしている人など。数え上げたらきりがないほどいろいろな人たちがいて、毎日兄弟のように暮らしていました。もちろん、隠しごとがあっても、すぐにばれてしまうありさまでした。

寮では面白いことや嫌なことがたくさんありましたが、今にして思えばすべてが懐かしくよい思い出となりました。その一例として部屋回りについて触れたいと思います。その部屋回りとは、各部屋の室長が、一升瓶を片手に新人を連れて他の部屋にあいさつに行く一種の儀式でした。夜になると寮のどこかであいさつの大きな声が聞こえてきます。長い廊下や階段の下から上まで、こだまのように声が響き渡り、それは、まるで新人たちの悲鳴のようでした。その悪夢は、寮に入って数日でやってきたのです。好きなテレビを見ても気が気ではありません。どきどきしながら、ひたすら来るのを待つのです。そして、自分の部屋。まずは、先方の新人のあいさつ。つぎに、先方の先輩から一合カップになみなみと酒が注がれ、それを一気に飲み干し、ありったけの声を出して一挙に叫ぶのです。

「×××号室あいさつさせていただきます。室長は×××自分は×××以後よろしくお願いします。」

声が小さければやり直し、また注がれるところから

始めるわけですから真剣です。一発でOKをもらわなくてはなりません。現在では想像もつきませんが、当時の自分は、酒が大嫌いで一合だけでも辛い思いでした。さすがに、一晩で二回、部屋回りがあったときは、ベランダでもどしながら、何て寮生活はつらいのだろうと嘆き悲しみ、涙が止めどなく出てきたのを覚えています。

何度、寮を出ようかと思ったことか。しかしながら、それを思い留まらせてくれたのは三上さんのような優しい先輩が、心の支えになってくれたからです。ありがとうございました。今でも感謝しています。そんな意味で寮生活は、強靱な忍耐力と寛容の精神を学ぶうえで貴重な4年間になったと思います。

それから寮は、芸をみがく修行の場でもありました。先輩たちが無理やり注いでくるので、飲めない自分は芸をして逃げていたのです。面白いもので知らず知らずのうちに芸は磨かれたようで、会社の新人歓迎会でウルトラマンショーを演じたところ、えらく受け名前をすぐに覚えてもらいました。『芸は身を助ける』の諺を実感したのはこのときでした。その後、会社で宴会部長と呼ばれるようになりましたが、いろいろな出来事もあり、結局、縁あって千葉県に転職し、現在、職業訓練指導員としての役に徹する傍ら、寮の生活を懐かしく、また、ほろ苦く思い出している今日この頃です。

次のリレートークは、同級生で学生時代に俳優を目指していた鹿児島県立吹上高等技術専門校の溝君にバトンを渡します。そういえば、彼の芸は人気がありましたね。